

## 声に出してシェイクスピア—悲劇編その1—『マクベス』

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 小泉 勇人

### はじめに：概要

東京工業大学リベラルアーツ研究教育院主催・夏のワークショップ2017「声に出してシェイクスピア 悲劇編その1『マクベス』」は、谷岡健彦本学教授によるコーディネイトのもと、新国立劇場はじめ数々の舞台に立つ下総源太郎氏を講師に迎え、講義を本学教員の小泉が担当し、7月6日・7月20日・8月3日・8月24日・8月31日の計5回をかけて開催された。〔(1)解説聞いて、(2)プロの俳優さんと読んで、(3)最後に発表会!〕とキャッチコピーにあるように、作品の解説と音読および演劇ワークショップを重ねながら発表会へと展開していく、というコンセプトであった。

1回分の構成は、一時間半ほどが俳優・下総源太郎氏による演技指導および受講生による発表準備に当てられ、残り30分ほどが小泉による講義に当てられた(この割り当ては回によって前後することもあった)。参加人数は開催までに46名の通し券申し込みがあり、最終的には40名の枠を46名までに広げての受付を行った。参加者の内訳は、東工大生が14名、教職員が8名、一般参加者が24名でのスタートであった。

発表準備の大まかな流れとして、1回目で全受講生は4グループに分かれ、これらのグループは初回から第4回を通じて独自に特定の場面を研究し合い、読み合い、演出を練る。最終の第5回目は発表回であり、各グループが順番に独自に演出する芝居を見せる。各グループには春・夏・秋・冬という名前が付された。最初は自己紹介から始まり、舞台発表に向けて場面の理解、読み合わせ、演出についての提案を出し合う。受講生達は徐々に打ち解け合い、グループごとに異なる『マクベス』の世界観を構築していく。以下、プロジェクトの報告として、下総源太郎氏による演技指導と受講生による発表準備、小泉による『マクベス』講義のコンセプト、受講生による発表について記したい。

### 下総源太郎氏による演技指導・受講生による発表準備

#### (1)導入・準備運動

下総氏による演劇ワークショップの導入は、氏の長年のキャリアを通じて培われてきたプロフェッショナルな方法に基づき、念入りに行われた。毎回の冒



下総 源太郎氏 (画面中央)

頭、テキストを輪読する前、まずは呼吸を整え身体をほぐすことから始まる。受講生が教室に揃い始める前から、ノラ・ジョーンズが歌う“Don't Know Why”のCDをさりげなく流されることで教室全体にある種の落ち着いた雰囲気聴覚的なレベルでもたらされる。教室に入ってくる受講生達も、そのような環境の中に身を置くことで、個々にゆっくりと演劇的な世界観にモードを切り換えていく。受講生全員が集合し、開始時間が来たら全体で大きな輪を作る。CDの音楽を止め、氏が建物の外から聞こえる音に耳を澄ますよう促す。受講生達は身体を「天井から釣り下げのような感覚で」すっと伸ばし、指示にしたがってゆっくりと深呼吸を行う。外部からの音と、自分の体の伸び、そして落ち着いた呼吸、輪になっているためお互いを見つめ合うその瞬間の関係性などが有機的につながり、受講生全員が一体となるような感覚を覚えていく。

#### (2)テキストの輪読

準備運動の後、いよいよ『マクベス』のテキストを全員で手に取り、声に出して読み始める。第五幕における「明日、また明日、また明日…」から始まる独白、通称トゥモロー・スピーチを取り上げ、全員で音読する。下総氏がどこでセリフを区切るか(どこで一呼吸置くか)を提案し、全員で一つのリズムを整えながらトゥモロー・スピーチを読み上げる。こと演技といえば個人を強く打ち出すものだと思われがちだが、少なくともこの段階では各々が独りよがりな発声や抑揚に陥り過ぎないように、ある種の巧みな抑制感が共有される。すなわち、受講生全員が息を合わせ、連帯感を保ちながら一斉にトゥモロー・スピーチを読み合わせ、シェイクスピアの筆致が描き出す「死を想え」の精神をなぞり、非日常的な空気感を創りだ

していたのである。

### (3)ワークショップ発表のコンセプト

下総氏が提示したワークショップ発表のコンセプトは、指定したいくつかの場面を自由に組み合わせ、まるで映画の予告編を作るかのように一つの舞台を作り上げるといったものであった。身体と呼吸の準備を整え、トゥモロー・スピーチを全員で声に出した後、受講生達はグループでの演出・演技の稽古に取り掛かる。四つのグループに分かれ、台詞の読み合わせ、配役、演出についての考えを交換し合い、最終回での発表に向けて準備を進める。受講生達は老若男女が多様に混ざり合うグループの中において、一人一人が自分の個性と周りとの共同活動を練り合わせながら、彼ら自身の編集・解釈に基づく『マクベス』を、一つの舞台として昇華させることになる。

### (4)演技指導

下総氏はグループごとの活動をつぶさに観察し、必要な場合は絶妙なタイミングで演者の立ち位置、動き、演技についても提案を行う。そのプロフェッショナルかつ細やかな稽古指導に受講生達も誠実に応え、演技演出についての豊かなコミュニケーションが展開される。その一方で氏は、各グループで計画されている演出やテキストの読み方に過度に立ち入ることは抑制し、付かず離れずの絶妙な距離感を保ちながら受講生の自発的な行動を促していた。そういったバランス感覚の巧みさにより、自発的に一つの舞台作品を作り上げていく楽しみが受講生一人一人の中で確実に培われていった。臨場感に溢れ、豊かなコミュニケーションに恵まれた現場がそこでは創出されていたのである。

## 『マクベス』講義のコンセプト

受講生が発表を行う第5回目を除き、それまでの4回分を通じて『マクベス』についての講義を筆者が担当した。講義にあたっての基本コンセプトは、①基礎的な知識②ややマニアックな学術的知識③シェイクスピア映画、の三要素を組み合わせることであった。一般的なレベルから専門的なレベルまで話の範囲を幅広く取り、どのような受講生にとっても興味を持ってもらえる内容を目指した。より直感的に興味を持ってもらうには視覚的な情報が大きな役割を担うため、プレゼンの形式としてはパワーポイントスライドをふんだんに活用した。具体的な画像・映像を積極的に示すようにし、学術的な議論や分析は踏まえつつ、講義そのもののエンターテインメント性を高めることにも力を注いだ。以下に述べる詳細における要点は全て、何らかの形で画像もしくは映像を用いて紹介している。

### (1)『マクベス』の時代/スコットランド/シェイクスピアの言葉

第1回目の講義では導入の意味合いも込め、『マクベス』が書かれた17世紀イングランドの時代背景、スコットランドという舞台設定、そしてシェイクスピアの言語表現について解説を試みた。

まず、スコットランドの地図を確認し、『マクベス』に登場する地名を確認するところから始めた。11世紀スコットランドという『マクベス』の世界観がPrimitive（原始的）でありDreary（荒涼）である点を紹介するにあたり、視覚的な参考情報として映画『マクベス』（ジャスティン・カーチル監督、2015）を取り上げ、冒頭の場面を提示した。

次に、17世紀イングランドという時代背景を紹介し、『マクベス』の執筆年が1606年（推定）であり、それはすなわちジェームズ1世即位の3年後であるという点を指摘した。そこで受講生と共有した問いは、「なぜ、『マクベス』の舞台がイングランドではなくスコットランドなのか？」というものであった。言い換えれば「なぜ16世紀ジェームズ朝イングランドで、11世紀スコットランド王の話を書く必要があったのか？」という問であり、ジェームズ1世がスコットランド出身であるという事実を考察の出発点とした。『マクベス』の背景には、ジェームズ1世そしてイングランドへの賛辞があったのではないかという仮説を受講生と共に検証し、「王位を強奪した暴君の国家スコットランド」という辺境の過去を描き出すことで、「ジェームズが統治する国家イングランド」という、シェイクスピアが生きた時代のイングランドの現在を強調する意図がシェイクスピアにはあったのではないか、という解釈について考察を深めた。

最後に、シェイクスピアの言語表現について注目し、オクシモロン (oxymoron; 撞着語法 / 形容矛盾) を取り上げた。矛盾する言葉同士を組み合わせる修辞技法はオクシモロンと呼ばれ、シェイクスピアはこの技法の名手であった。“Parting is such sweet sorrow” (別れとはあまりに甘美なる悲しみ)、“Very tragical mirth” (とても悲劇的なお笑い)、“So musical a discord” (あれほど音楽的な不協和音) などシェイクスピア劇における具体例は枚挙にいとまがない。『マクベス』はこのオクシモロンがあらゆる意味で支配する劇でないかという見解の妥当性を受講生と共に考えた。『マクベス』に登場するキャラクターは自分のことであれ、それ以外のことであれ、物事をオクシモロンで表現し、事実、矛盾した行動をとって破滅していく傾向にある。冒頭の魔女の台詞からしてすでにオクシモロンであり、彼女達は「いいは悪いで悪いはいい」(Fair is foul, and foul is fair) と唱歌し合い、そのあとに彼女達と邂逅するマクベスは「こんないいとも悪いとも言える日は初めてだ」(So foul and fair a day I

have not seen) と呟きながら舞台上に登場する。

また、オクシモロンはキャラクターの心理的葛藤を表現する際に絶大な効力を発揮する。忠義と野心の間で揺れるマクベスは「悪いはずはない、いいはずもない」(Cannot be ill; cannot be good) と逡巡し、そんな夫の心理を巧みに言い当てるマクベス夫人は「手に入れたいと望みながら手を汚すことは望まない」(What thou wouldst be highly, / That wouldst thou holily) と喝破する。このオクシモロンな言葉遣いはやがてキャラクターの思考をも侵食していき、王の殺害をためらう夫に業を煮やした夫人は「自分の乳房を吸う赤ん坊がどんなにかわいいか…その脳味噌を叩きだして見せましょう」(How tender 'tis to love the babe that milks me...dashed the brains out) という、極めてグロテスクな表現を口にするに至る。こういった台詞の例を示しながら、シェイクスピア的な言葉遣いを受講生と共に鑑賞した。

## (2) トゥモロー・スピーチの奥深さ

第2回では「トゥモロー・スピーチ」の魅力に迫った。これは夫人の死の報告を受けた直後にマクベスが語る独白であり、辞世の句でもある。その内容から人間の虚しい一生を出番の時だけ舞台上に上がる役者への哀愁と重ねて語るといふ、第五幕第五場における最大の聴かせどころである。

第一に、英語原文では何と言っているのかを解説するところから始めた「声に出してシェイクスピア」の講座名にふさわしく、受講生には英語原文でも Tomorrow Speech を声に出してもらうことにした。トゥモロー・スピーチは第1回目より下総氏による指導のもと繰り返し小田島訳で輪読し、第5回目の発表では演出の中に必ず盛り込むことになっている箇所である。受講生の発声は日本語訳でも十分に熱が入っていたが、英語原文の発声においても堂々たる声量と抑揚が発揮されており、その力にリード役である筆者が圧倒されることもしばしばであった。

第二に、これまでの舞台演出においてトゥモロー・スピーチはどのように演出され、俳優によってどのように発話されているのかを取り上げた。とりわけ受講生にとって注目を引いたのは、トレヴァー・ナン演出イアン・マッケラン主演版(1979)とルパート・グールド演出パトリック・スチュアート主演版(2010)の比較であった。両演出・主演それぞれに味のあるトゥモロー・スピーチを鑑賞することで、発声法や演出の多様性を具体的に把握できたのではないだろうか。

最後に、トゥモロー・スピーチの素材となったと考えられている聖公会祈祷書(Book of Common Prayer, 1599)を取り上げ、そこに書かれている記述を参照した。『マクベス』における "And all our yesterdays have lighted / fools the way to dusty

death" (昨日という日はすべておろかな人間が塵と化す死への道を照らしてきた) という下りは、祈祷書の "Earth to earth, ashes to ashes, dust to dust" と照合することができ、"Life's but a walking shadow" (人生は歩きまわる影法師) は "he fleeth as it were a shadow" と響き合う。

その流れの中で、祈祷書に書かれた他の記述に "Man that is born of woman hath but a short time to live" (女から生まれた者は短い生を持つに過ぎない) と書かれてある点は注目に値する。"Man that is born of woman" (女から生まれた者) とは人間一般を指すと考えられるが、同時に、マクベスが幻影から授かる言葉に "none of woman born / Shall harm Macbeth." (女が生んだものなどにマクベスを倒す力はない) とあるのを想起させられる。そしてこの予言は、"Tell thee, Macduff was from his mother's womb / Untimely ripped." (もう一度聞いてみる、マクダフは女から生まれる前に、月足らずのまま母の腹を裂いて出てきたと言うだろう) とマクダフ自身が言い放つことによってマクベスの敗北を決定づけてしまう。さらに注目すべきは、「月足らずのまま母の腹を裂いて」という表現が帝王切開を指している点である。ここで受講生と共有した疑問は、「帝王切開で生まれたからといって、なぜマクダフはマクベスに勝利できるのか?」であった。

この謎は16世紀の帝王切開をめぐる医学的事情を知れば解明する。帝王切開が描かれた16世紀の木版画を示せばよりはっきりするが、当時の帝王切開は母体が生命活動を停止してから行うのが一般的であった。帝王切開を描いた木版画には死亡した母体から赤子が取り出される瞬間がはっきりと表現されている。すでに死亡した母親の胎内から誕生したマクダフは、すぐ身近にあった死を生まれながらにして乗り越えた英雄的存在であったのだろうか。もしくは生命活動を停止した肉体から誕生した得体の知れない不気味かつ超越的な存在としてマクベスの目、そして当時の観客の目には映ったのではないかと受講生に問いかけることで第2回目の講義は終わりを迎えた。

## (3) シェイクスピア劇と黒澤映画『蜘蛛巣城』

第3回では黒澤明によるシェイクスピア劇の映画翻案『蜘蛛巣城』(1957)を取り上げ、黒澤は『マクベス』をどう映像化したのかを受講生と共に分析した。話をするに当たり、魔女、マクベス夫人、役者の表情に話題を絞った。黒澤は能舞台の要素を積極的に取り入れており、『蜘蛛巣城』における魔女の表現はその顕著な例である。能『黒塚』における山姥のイメージを魔女に投影し、特異なキャラクターとしての老婆を登場させているのである。また山田五十鈴演じる浅茅(マクベス夫人)の演技も能との関連が深く、ここで

は主に、夫を君主殺害へと駆り立てた直後に彼女が能の舞を踊る場面を取り上げた。また、黒澤が各キャラクターの表情を能面に見立てて演出している点も注目しに値する。鷲巣武時(マクベス)は平太(中年の武士)、浅茅(マクベス夫人)は曲見(中年の女性)、三木(バンクォー)は中将(貴族)と言うように、それぞれの役者は各能面のイメージに基づいて表情を作っているのではないか、という解釈を試みた。

本講義の締めくくりは、黒澤映画におけるダイナミズムの解説である。受講生には、『蜘蛛巣城』では①洗練された身体動作(様式美)と②「活劇」のミザンセーン(映画的演出)の二段階構成に基づいて演出が行われているのではないかと仮説を提示した。1段階目として、『蜘蛛巣城』では能的な所作ならびに洗練された舞台表現に基づく動作表現、音響、語りの組み合わせが見られる。それが顕著となるのは、鷲巣が錯乱した浅茅を目の当たりにする場面であり、沈黙の中で鷲巣が御簾に見立てた着物をパッと開ければそこには錯乱した浅茅がいる、という流れである。そして2段階目として荒々しく予測不可能なショットを加えることにより、黒澤は俳優の「自然な」リアクションを引き出し、「活劇」のミザンセーン(映画的暴力演出)を構築している。例えば『蜘蛛巣城』のクライマックスにて、鷲巣演じる三船敏郎は至近距離から無数の矢弾を実際に射掛けたため、リアルな恐怖で表情が歪んでいることがわかる。

このような分析を紹介しつつ、黒澤明がシェイクスピア劇の『マクベス』をどう映画的に再創造したのかを受講生と共に考察した。洗練された身体動作に基づく能的な舞台表現と、突発的かつ荒々しい動作やショットを組み合わせた映画的暴力表現を巧みに組み合わせさせた黒澤の映画術、そこから引き出されたシェイクスピア劇の新鮮な読み方は、受講生の関心を幅広く集めていたように思われる。

#### (4) ジャスティン・カーツェル監督作『マクベス』と現代の戦争

第5回は受講生による発表が中心となるため、第4回目が実質的に最後の講義となった。ここでは改めてジャスティン・カーツェル監督作『マクベス』(2015)を取り上げ、16世紀に書かれた『マクベス』と21世紀を生きる私たちはどう関わられるのかというテーマを掘り下げた。つまり、『マクベス』映画の最新作を通じてシェイクスピア劇を現代的に読み直す試みである。そこで注目したのは、ダンカン王殺害直後におけるマクベスの奇妙な動作、すなわち血まみれの王の遺体の側で眠りにつくというショットである。これが奇妙な演出に見えるのは、原作の『マクベス』が王殺害後に罪の意識に苛まれ不眠へと陥っていくマクベス夫妻の悲劇を強調しているからである。「マクベスは眠

りを殺した」の台詞に象徴されるように、マクベスは主君を殺害して眠れなくなるのである。ところがこの台詞は、映画版脚本からは徹底的に削除されている。それどころか映画が我々観客に見せるのは、王の遺体の側で眠り(これはこれで異常な行動であるが)、その後朝の湖で体を清めてサッパリするというマクベスの振る舞いである。ここまでくると、こうした映像演出はシェイクスピア劇の改変でもあり、そのように改変してでも伝えなかったメッセージ(時代性)があるとみて取るのが自然ではないだろうか。その点を踏まえ、受講生と共にスコットランド、マクベス、そしてダンカン王は何を象徴しているのかを考察した。

そこで提示したのは、この映画版『マクベス』で描かれていることは、ポスト・イラク戦争という現代的時代状況のメタファーではないだろうか、という仮説である。原作において、芝居は戦況報告から始まる。マクベスとバンクォーは戦地からの帰還兵であり、帰還後のマクベスは幻聴や幻覚(=魔女)に付きまといわれ、ついには自らの領土内で君主を殺害する。これは20世紀後半から21世紀にかけて米国が体験してきた悪夢を想起させはしないだろうか。つまりカーツェル監督は、現代の「マクベス」達はイラク・アフガン戦争にて激戦地をくぐり抜けてきたものの、帰還兵としてPTSD(Post Traumatic Stress Disorder; 心的外傷後ストレス障害)を患ってしまった、という寓話として『マクベス』を語り直しているのではないだろうか。

この仮説を裏付けるという意図もあり、製作者の証言を紹介しつつ、受講生には映画翻案の背景を意識してもらった。カーツェル監督本人によれば、「映画用の脚本は現実性に基づいたもの」であり、製作にあたり「武将マクベスは戦場で(精神的な)傷を負った兵士だという気づきをえた」という。マクベス役を勤めたマイケル・ファスベンダーによれば、「マクベスによる裏切りと殺人は、現代で言えばPTSDの結果だと診断される」のだという。「イラクやアフガニスタンから帰国した今日の兵士達を見れば、彼らにも(映画のマクベスと同じような)幻覚が見えていることがわかる」とファスベンダーは付け加える。(以上、カンヌ映画祭プレスカンファレンスにて)。

これらの証言を改めて踏まえてみると、映画『マクベス』を21世紀的に観る手立てが揃うのではないだろうか。例えば次のような政治的な読みが可能となる。すなわち、反乱軍(イラク/アフガニスタン)を抑え込もうとするスコットランド(アメリカ合衆国政府)の王ダンカン(G.W.ブッシュ大統領/合衆国政府)はマクベス達(ベテラン海兵隊, SEALs etc)に戦地攻略(イラク、アフガニスタン進行)を命じる。帰還後、幻覚、幻聴、錯乱、突発的な暴力行為に及んだりもする症状(PTSD)に悩むマクベス(イラク/アフガン戦争帰還兵)は思い余って主君を殺害する…。つま

リダンカン王殺害は、王の戦争遂行によって PTSD を患った一兵士による復讐であり、遂行命令者を抹殺することによって次の紛争が発生する可能性を断とうとする倒錯的な英雄行為であるとも言えるのではないだろうか。そうした行為を経た上であるからこそ、PTSD は一時的な回復を見せ、故にマクベスは一時的にせよ眠りにつくことができたのではないだろうか。このような仮説を、深読みのそしりを受ける覚悟もしつつ提示することで今回の講義を締めくくった。

### 受講生による発表

第5回目は、これまでの成果としてグループごとに芝居を発表し、まるで一つの映画の予告編であるかのように『マクベス』の世界を披露しあう場であった。全4回を通じ、受講生は身体と呼吸を整える訓練、「トゥモロー・スピーチ」を全員揃っての音読、戯曲への理解を深める講義、そしてグループごとの演技演出を練り上げてきた。受講生はシェイクスピアの言葉を実際に声に出し、呼吸と身体の準備を整え、演出を提案し合って演技へと昇華させてきたのである。

雑感ではあるが、ここでは観客の一人として鑑賞した中で強く印象に残った箇所を一部取り上げつつ、受講生の工夫について記しておきたい。言葉を発する強弱、衣装、小道具、音響、動作、背景や明暗を利用した視覚的演出と、受講生による舞台演出の工夫は実に多彩であった。これらの要素が台詞の使い所や発声と絶妙に混ざり合い、本格的な劇世界がそこには創り出されていた。「声に出してシェイクスピア」のタイトルにふさわしく、自らの発声を巧みに調整して演出に加えている受講生がそこでは多く見られた。囁くように魔女の台詞を話し続けていたかと思えば一転、強烈な調子で一つの言葉を打ち出すことで舞台全体にメリハリを生み出す瞬間もしばし見られた。あえて淡々と言葉を発する演技者と抑揚をつけて話す演技者が合わさることで生まれる独特のリズム感からは、シェイクスピア劇を自分たちのものとして楽しむ受講生の姿勢がありありと伝わる。衣装として黒いベール状の衣服を持参し、それらを纏って魔女が現れる場面を演出しているグループがあった。また、小道具として台所ナ

イフに銀紙を貼り付け安全にした上で、赤マジックで血液の付着を表現するという芸の細やかさが目を引くグループもあった。マクベス役の周りを激しくぐるぐると回りながらセリフを語る魔女達もいた。膝をつく弱気なマクベスを取り囲んで何かを耳に囁いて混乱させる魔女達やマクベス夫人もいる一方、男女の数の違いを利用し、多数の女性陣がヘタリ込む少数の男性陣を奮い立たせたり苛んだりする図式を鮮やかに強調する演出も見られた。いずれのグループにおいても、マクベス夫人の凄みに圧倒されるというマクベス像が共通して見事に表現されていたのは興味深い。

音の演出にこだわりを見せるグループもあり、バケツにビニールを張った部分を棒で激しく叩くことで雷の音を表現したり、魔女の登場に合わせてドラムのように鳴り響かせる手法も見られた。また、視覚効果として、細かく切った紙を撒くことで神秘的な雰囲気を引き出す演出もあれば、ガラス窓を背後にして立ち外からのかすかな灯りを利用し、洗練されたホラー的雰囲気を高めるといった演出の工夫も目を引いた。音響効果に関して言えば、シェイクスピアが生きた16-17世紀の演劇世界は手作りの音響効果にあふれていた。小さな石ころを長方形の箱に入れて大きく傾けて雨音を表現したり、太鼓の音を雷鳴に見立てて激しく鳴らしていたのだ。吹き抜けの円形劇場であるグローブ座は天候や気候、徐々に夕闇が深まっていく自然照明の変化を受けながら観客に舞台を見せていた。受講生による聴覚的・視覚的演出への飽くなき工夫は、シェイクスピア時代のそれに対する探究心となら変わらない。シェイクスピア時代のグローブ座で活躍した役者達よろしく、受講生はその深い演劇熱を思う存分に発散していたのである。

### 終わりに

筆者は着任間もないにも関わらず、谷岡教授からのまたとないお誘いでこのように刺激的なプロジェクトに参加させていただいた。専門領域であるシェイクスピア劇/映画について講義をする機会を得た以上に、俳優・下総源太郎氏を中心として行われた演技ワークショップ活動、受講生達による毎回の入念な読み合わせ、演出プランについての意見交換の場、そして多彩な舞台演出が繰り広げられた最終発表を拝見するという、またとない貴重な機会に恵まれた。コーディネーターの谷岡健彦教授、毎回刺激的な演技指導をされていた下総源太郎氏、受講生へのきめ細かい連絡から会場設営の準備まで整えてくださっていた信木庸子さんを始めとするリベラルアーツ研究教育員事務の方々、そしてシェイクスピアに興味を抱きワークショップに参加して下さった受講生の方々一人一人に深い感謝を申し上げつつ、この度の報告を締めくくりたい。



教室風景